

## 「県政タウンミーティング」会議録

テーマ 『学びと自治の力で拓く新時代に向けて』

日時 平成30年4月30日（月・祝）14:00～16:00

場所 イオンモール松本（松本市）

### 目次

1 開会・パネラー紹介	P 2
2 知事あいさつ	P 3
3 活動事例紹介	
・土屋みどりさん	P 7
・岩原裕右さん	P 11
4 知事とのディスカッション	P 30
5 知事総括コメント	P 34

### 【参加者 43人】

#### 鼎談者

・土屋みどりさん

特許翻訳・通訳サービス『COURINA（クーリナ）』代表

女性活躍応援団体『ココノチカラ』代表

国際交流団体『Go Glocal（ゴー・グローカル）』代表

・岩原裕右さん

未空<sup>みそら</sup>うるし工芸 代表

・長野県知事 阿部守一

## 1 開会・パネラー紹介

【広報県民課企画幹 塩川ひろ恵】

皆様、お待たせいたしました。私、本日の進行を務めます、長野県広報県民課の塩川ひろ恵と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

ただいまから県政タウンミーティングを開催いたします。この県政タウンミーティングは、知事が各地へ伺って県民の皆様と意見交換を行い、県政に反映させることを目的に実施しており、本日は今年度第1回目でございます。

さて、本日のテーマでございますが、『学びと自治の力で拓く新時代に向けて』でございます。県では今年度、県の総合5か年計画、『しあわせ信州創造プラン2.0』を策定いたしました。本日お配りいたしました封筒の中に概要版の冊子が入っております。

このプランに基づいて、県民の皆様とともに取組を進めていくための基本目標が『確かな暮らしが営まれる美しい信州 学びと自治の力で拓く新時代』でございます。

本日はこの基本目標をテーマといたしまして、地域で活躍されているお二人をお招きしております。日ごろの活動内容をお話いただき、その後の知事や皆様との意見交換等を通じて、本日のテーマについて、お集まりの皆さんそれぞれのお立場で主体的に考え、実践するきっかけにいただければと考えております。

それでは、ここで本日お招きしたお二人をご紹介します。まず、皆様から向かって左側から、土屋みどりさんです。土屋さんは塩尻市にお住まいで、本業は特許翻訳、通訳等をされておりますけれども、そのほかに女性の活躍を支援する『ココノチカラ』という団体の代表と、国際交流団体『ゴー・グローカル』の代表をされております。皆様、プランをご覧くださいませでしょうか。プランの23ページになりますが、こちらの『女性が輝く社会づくり』ですとか、17ページの『世界を魅了するしあわせ観光地域づくり』などに関係された活動をされております。土屋さん、よろしくお願いいたします。

もうお一人ですけれども、岩原裕右さんです。岩原さんは、木曾平沢で『未空うるし工房』の代表をされています。伝統技法を守りつつ、これまでの漆製品の概念を覆すような製品をつくられています。

同じくプランの15ページをご覧くださいませでしょうか。『地域に根ざした産業の振興』ということで、こちらに関連した活動をされています。岩原さん、よろしくお願いいたします。

この後、お二人には日ごろ取り組まれている活動についてお話しいただきますが、各

分野で精力的に活動されているとても魅力的なお二人ですので、ご期待ください。

それでは次第に沿って進めてまいります。

最初に阿部知事からごあいさつを申し上げます。

## 2 知事あいさつ

【長野県知事 阿部守一】

皆さん、こんにちは。本日は大勢の皆さんにお集まりをいただき、本当にありがとうございます。ございます。

今日は県政タウンミーティング、この松本のイオンで開催をさせていただいたところ、本当に連休中の楽しい時間をお過ごしのところ大勢の皆さんにお集まりをいただきまして大変ありがとうございます。

今日は土屋さんと岩原さんに協力をいただきながら、長野県の新しい総合計画について県民の皆さんに理解を深めていただきたいというふうに思いますし、また、逆に皆さんもいろいろなテーマや課題をお持ちの方も多いと思いますので、この総合計画を進めるに当たって、こんなことを工夫したほうがいいんじゃないかというようなご意見もぜひいただきたいというふうに思います。

今回の総合計画は、皆さんにパンフレットをお配りをしていると思いますけれども、これは概要の概要みたいな冊子ですので、個々の政策はこれだと読み取りづらいところがあると思いますが、ただ、皆さんと共有したい主なポイントはほとんどここに書かれておりますので、私が皆さんに強調したいことを何点か、最初にお話をさせていただきます。

まず『しあわせ信州創造プラン2.0』というのが、新しい県の総合計画の名前です。県は、いろいろな仕事をしています。福祉の仕事もあれば、教育の仕事、産業振興の仕事など、いろいろな仕事をしていますけれども、いろいろな計画の中の最も基本的な計画、最も上位の計画がこの総合計画であります。平成29年度まで『しあわせ信州創造プラン』に沿って取組を進めてきました。おかげさまで、例えば土屋さんに関係するインバウンドの観光客も昨年の数字で132万人台までいって、皆さん皮膚感覚で外国からのお客さんが増えているよねと感じられると思いますけれども、着実に増加をしています。あるいは農業農村総生産額というのも3,100億円を超えて、私が知事になったときはまだ2,900億円ぐらいでしたから、何か農業元気がないよねという感じは一般的にはありませんけれども、生産額ベースで見ると、農業農村の総生産額は、少しずつではありますけ

れども増えていると。これもいろいろな取組を、しあわせ信州創造プランを通じて実施をしてきた成果だというふうに思っています。

今回、新しい総合計画をつくるに当たって、私もいろいろな皆さんと対話をしました。そして職員にもいろいろな団体とか、いろいろな県民の皆さんとよく対話をして、どんな考え方をお持ちの人が多いのか、どんな希望を持って、どんな悩みがあるのか、そういうものをちゃんと聞いてこいということをやって集約して、この計画をつくらせていただきました。

この計画、そういう意味で、今までのしあわせ信州創造プランを踏襲しながらバージョンアップさせるという意味で2.0と、『しあわせ信州創造プラン2.0』という名前にさせていただきます。

一番、強調しておきたいのがこの1ページ、しあわせ信州創造プラン2.0の特色ということが書いてあるページがあると思いますけれども、その中でも一番左上に、『学びと自治の力を推進エンジンとして政策を展開』というふうに書いています。今回の計画のポイントはもうこれに尽きるといっても過言ではありません。これに尽きるというのは、またちょっと土屋さんとか岩原さんとお話をしながらいろいろなことを考えていきたいと思えますけれども、新しい総合計画をつくるに当たって、さっきいったようにいろいろな分野があります、福祉もあれば、教育もあれば、産業振興もあれば、国際交流もあれば、文化行政もあれば、いろいろなことをやっています。それぞれやらなければいけないことがありますけれども、共通する根本的な概念というのは一体何なんだろうかと。私は長野県の知事ですから、長野県の知事として考えなければいけないのは、長野県の特色であり強みをどう生かすのか、そこにやっぱり力を入れなければいけないというふうに思って、そうすると、これから新しい時代をつくっていく上で、最も重要なのは一体何だろうなというふうに考えた結果がこの『学びと自治』です。

県知事として県外へ行くと、長寿県ですなと言われます。男性の平均寿命が滋賀県に抜かれたので、若干、残念なところがありますけれども、男性も女性も平均寿命がベスト3に入っているのは長野県だけです。そういう意味では、長野県はまだ長寿県です。これ海外、世界の人からも言われます。

それからもう一つ、県外の人に教育県ですなというふうに言われます。ただ、教育県というのは一体何なのかということは、多分、共通認識はあまりないんだろうと。おそらく多くの人がイメージしているのは、よくマスコミに出る全国学力テストの成績。長野県の平均順位は、必ずしもあまりよくないです。これは我々もしっかり謙虚に受けとめて、どう改善するか教育委員会に頑張ってもらわなければいけないというふう

に思っています。

でも、教育というのは子どもたちの平均点を出して、それがちょっといいとか悪いとかだけで教育県かどうか測れるもんじゃないというふうに思います。私は、教育を大事にしてきた、人づくりを重視してきた長野県の伝統というのは今も残っていると思います。図書館に行けば多くの皆さん、お年寄りも含めて学んでいますよね、一生懸命学んでいます。それぞれの地域、土屋さんだって岩原さんも、おそらく学びをベースにこんな取組をされていると思いますけれども、いろいろな世の中の動きをちゃんと把握しながら自分たちで学びながら、さまざまな社会に貢献できる活動に取り組んでいる方が非常に多い県であります。

あるいは公民館活動が日本で一番盛んなのが長野県。公民館の数も多いですし、活動自体も活発化しているのが長野です。こういうことを考えると、やっぱり学びのベースというのは、昔、寺子屋が多かったとか、明治維新の直後に就学率が高かったということだけではなくて、今でも私たちに息づいているDNAの一つがこの学びだろうというふうに思っています。

それからもう一つは自治です。長野県は広いです。松本の人が長野市だったり飯田市に行く機会はもしかしたらあまりないかもしれないですけども、長野県というのは、『信濃の国』がちょうど今年で県歌制定50周年ですけども、大変多様な県土、多様な文化を育みながら、それぞれの地域の特色を生かしながら発展してきた県です。一言では語れないですね。松本の文化と長野だったり佐久の文化は結構違いがあります。でも、その違いがあるのが長野県の強みだというふうに思っていますし、その伝統や文化や強みを守ってきたのは、県民の皆さん一人一人の力にあります。

昨日、実は伊那市の長谷へ行って、その中尾地区の中尾歌舞伎、ちょっとだけお休みしていたのがまた再開したというので見に行ってきましたけれども、山深いところで、こんなにすばらしい文化を江戸時代から継承してきているなんて、すごい力があるなというふうに思って拝見してきました。そういう自治の力、自分たちの地域を良くしよう、自分たちの文化を自分たちの力で継承しよう、そういう強みを持っているのも長野県の特徴です。これ、東京へ行けばそんなものはかなり薄れてしまっています。

今、AI・IoT時代で、いろいろな仕事がAIに置きかわってしまうんじゃないかというふうに言われています。それから右肩上がり経済成長する時代はもう過去のものなんで、これからはそんなに経済が急発展する時代ではなくなっている中で、いろいろな社会のシステムもそうした時代に適合するように見直していかなければいけない時代になっています。

それから、長野県は長寿県ですけれども、これから人生100年時代。もはや90歳、100歳まで生きるのは当たり前の時代になっています。今までの常識ではもう通用しない時代になってきます。そうした新しい時代をつくっていく上で、何が必要なのかということを考えると、やっぱりこの学びと自治、それぞれの皆さんが、今日いらっしゃっている土屋さんだったり岩原さんも含めて、県民の皆さんがそれぞれの分野で学んで、そして自分たちができることは何なのかということを実際に考えて行動していくことを抜きにして考えられません。私、行政なんで、あまり私が言う問題かもしれないんですけども、もちろん私も県知事として、あるいは県行政としてやらなければいけないことをしっかりやりたいと思いますし、またそういう面では、お前、ここが足りないぞというふうに皆さんから叱られることもいっぱいあると思いますけれども、でも行政だけの力では限界があります。例えばどこかの地域で絶滅危惧種になっているような生態系を守ろうというときに、行政だけではできません。地域の皆さんの協力がなければそういう自然は守れません。

あるいはお年寄り、ひとり暮らしのお年寄りをどう支えようかということ考えたときに、例えば県がやりますとって、公務員が全部対応していたら、皆さんからどれだけ税金をいただいても足りません。そんな高コストな行政はできません。やっぱり地域の皆さんの支え合い、助け合いというものと、そしてやはり行政が本当にやらなければいけない、例えば介護保険だったり国民健康保険の運営をしっかりやっていくということがセットで、安心して暮らせる地域社会ができるわけでありますので、そういう意味で、我々行政も頑張らなければいけないですし、一人一人の県民の皆さんもできることでできることをしっかりやってもらうということも大変重要だと思っています。

このあいだ、障がい者の方とお話をして、私はすごく意気投合したんですけども、その方は車いすで24時間介護をしてもらわないと自分ではなかなか自立した生活ができない方です。でも、その方が言っていたのは、「私でもできることはある」と。例えば障がい者の人たちをどう自立させるかというのは、行政の人たちもしてもらわなければいけないけれども、自分たちが一番わかっていると。例えば相談相手になったり、どんなことをやればいいのかというのは自分たちが一番良くわかっているというふうに力強くおっしゃっています。それはそうですよね、私が幾らやったって、当事者の皆さんの思いは100%共有できないこともあります。そのときに、やっぱりその当事者の人たちが、やっぱりこういうところが不便だとか、あるいはみんなでこういう活動を一緒にやろうというふうに呼びかけてくれば、社会も良くなっていくわけでありますので、そういうことを考えると、そうした活動はもちろん自治だと思います。自分たちでできること

は自分たちでやっていくと。

そういう意味で、この学びと自治というのは長野県の強みであり、そして新しい時代をより安心できる社会、より希望を持てる社会にしていく上で重要な概念がこの学びと自治だと思っています。

ぜひ、この学びと自治ということが一番最初に皆さんと共有をさせていただいて、あと、土屋さん、岩原さんに具体的な活動をお伺いしながら皆さんと対話をしていきたいと思しますので、よろしくお願いいたします。

### 3 活動事例紹介

#### 【広報県民課企画幹 塩川ひろ恵】

それではお二人に日ごろの活動や仕事に対する思いなどについて順次、お話を聞きたいと思えます。

初めに、土屋みどりさんお願いいたします。

#### 【土屋みどりさん】

あらためまして、こんにちは。土屋みどりと申します。では早速、プレゼンテーションを始めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

私の活動内容としては『ココノチカラ』とあと『ゴー・グローカル』という団体を持っております。先ほど紹介いただいたんですけれども、普段の仕事は工業通訳というものをやっております、その工業通訳として自分で創業するということにやはり通訳として何ができるかというのを考えて、世界一の何かをやるって決めて、どうやったら世界一になれるかということで、世界一地元の経済活性に貢献する通訳になるというふう勝手に言いました。

世界一地元の経済活性ということなんで、これなら世界一になれるかなということで、そんな目標を持って事業をやっています。主に企業さんの通訳をしていたんですけれども、大きな企業さんが通訳を雇ってくれるわけですが、通訳として働いていても、企業の中にいるだけでは、何か、本当に地元の経済が活性化しているのかという疑問も出てきまして、パーソナルな生活でもいろいろと大変なこともありまして、ちょっと通訳という仕事から外れて活動してみようということで、まず立ち上げたのがココノチカラという団体です。

ココノチカラという団体は、2名の代表で立ち上げています。私と、あとかつて一緒に仕事をしてきたことのある清水里絵さん、今日、こちらにいらっしゃっていますけれども、清水里絵さんと二人で立ち上げました。私が自分で事業を始めたこともあり、創業支援の事業を担当すると、そして清水里絵さんはバリバリのキャリアウーマンなので、再就職支援とか女性のキャリアアップという事業のほうを担当して、この二人で始めた活動がココノチカラです。

もう一つはゴー・グローバル、地域の国際化の土台をつくるという目的で、これも代表を私のほうで務めさせてもらって副代表として清水里絵さん、あとここに載っていないメンバーも二人おります。

ココノチカラの活動から紹介していきます。ココノチカラの活動というのは、もう地元はどうやってお金を落とすかです。『女性の手に現金を』、これは女性が自由に使える現金を多く持つと、例えば今まで発泡酒だったものがビールになるとか、ワンコインのランチだったのが1,200円のプレートにするとか、地元で本当にお金が落ちるんですね。男性の場合ですと、これが大きいカメラレンズ100万円とかになったりするわけですが、女性の場合はいろいろなところで、スーパーとかでも美容とか健康にいいものを買ったりしてグレードアップします、生活が。女性の美容と健康にいいというものは家族全体の美容と健康にもいいわけですから、かなりの確立で。そうやって女性が現金を手にして、そして地域にどんどんお金を落とすしていく。それを目標にしようということで、ココノチカラで一番最初に始めたのが女性の再就職支援です。

お仕事お見合いフェスタというものを2014年に始めました。これは企業と求職中の女性がお互いに要望とか条件を話し合う。そして就職面談のような「あなたはどんな仕事ができるの」みたいな上から目線のものではなく、要望を出し合ってお互いに話し合っただけで妥協点を見つけていったりとか、こういうふうなら働けるよねという点を見つけていく、そういう場をつくりました。これ結構、県内でいろいろなところで開催していただいていた、2014年、日本でおそらく初であろうという試みとして私たちのほうで始めたものになります。これ平成27年度、地域発元気づくり支援金活用事例の知事表彰をいただきました。ありがとうございます。

もう一つの創業支援のほうでやっているのが『スターターズサロン』という創業支援講座になります。こちらは6回分の座学、あと、学んだことを実践するためのイベントを受講者に開催していただいて、反省点と対策をもって次の自分の事業に活かすという内容になります。

もう半強制的にイベントを行えというもので、地域の地方紙などにも出さなければい



けないというルールもあります。というのは、しっかり取材してくれる記者の方一人を説得できなければ、お客さん誰一人説得できないよということで、いい記事を書いていただくということも条件になっています。

このように、塩尻市さんに本当にご協力をいただいて、会場をかなり自由にに使わせていただいて、このようなイベントをたくさんさせていただいております。来場者の人数とかは400人を超えたりとか、かなり盛り上がるイベントになっていて、事業者さんのかなりの励みにもなっている部分です。今日、私が着ているのもその事業者さんがつくっていただいたものを、本日、身につけております。

こういった活動を通して、とにかく小さい規模で素早く失敗して経験値を上げるということを一番の目的にした講座になっているのがスターターズサロンです。

そして、さっき学びの話が阿部知事からありましたけれども、学びというものは、学んだ後で使って初めて身につくものだと思います。この学びを安心して使い倒すことができる場を提供することが、私たちのような団体の代表者とか団体のメンバーがやることではないかと思っています。なので、みんなで会を運営していく、コミュニティをつくっていく、一番最後にあるように、コミュニティに参加している以上、無責任な応援で終わらない。頑張っってね、あなたならできるよと、そんな一言では終わらないコミュニティ、厳しくもあり、やさしくもあるコミュニティを目指しています。こちら、関東経済産業局『創業支援ベストプラクティス』というふうに出選していただきました。ありがとうございました。

次はゴー・グローバル。

1つ目はインバウンド観光で『外国人観光客に有りのままを』と題しています。

こちらで今やっていることは、30年間空き家だった元民宿、これ豊飯豊衣（ほいほい）さんと読みます。こちらの所有者の上原さんという現在81歳になる男性と一緒にビジネスパートナー的な感じで組んでおりまして、ここは民宿の許可を保持し続けたままずっと空き家になっていたところなんです。そこを貸していただいて、英語のみで情報を発信しています。英語のみで公開することで、既存の民宿の方々と競合しないということを狙っています。もし、私たちのところがいっぱいになってしまっって旅行者さん泊められないということになったら、ほかの民宿にこういう方が何時に行きますからお願いしますみたいな感じで紹介したりしています。

30年空き家だったところ、2017年4月から始めて、今、18カ国から93名が51泊という状況になっています。外国人旅行者と一緒にゴー・グローバルのメンバーが地元を一

緒に探求すると。漆の工芸だとか禅の体験、お味噌づくり講習とかミニライブとか、そういうものに一緒に行ったりとかして、自分たちも学べるわけですね、漆とか体験をしたことがないのに、外国人旅行者を口実に一緒にできるというのは大きなことです。

あと、悩みや愚痴も全部言ってしまう。この地域でこういうところが壊れているんだけれども全然補修ができないんだよねとか、そういうところも旅行者と一緒に共有してしまふ。そういうありのままを伝える。そうすると、これをぜひ使ってくださいとってお金を置いていった旅行者さんもいるので、もう素直に何でも言うということが大きいことだと思います。

これはそのときの体験写真になるんですけども、座禅を組んだりとか、囲炉裏を囲んだりとか、これは一緒にライブに行ったとき、あとこれお味噌づくり。上原さんは英語が全然できないのに、地酒を持ってきて一緒に飲み交わそうやと、何もしゃべっていないのに3時間一緒に過ごすという、すばらしい方でございます。

そしてこの空き家となっていた民宿を活用するということは、インバウンド観光的に非常に、私は良い効果があったと思っています。というのは、既存の民宿と日本人が一切読まない情報を私たちは公開していることで競合を避けています。逆に外国人の方が多く来過ぎてしまった場合には、空いているところはないですかというふうに電話をかけたりして一緒にやっつけていける工夫をしています。

あと、上原さんは81歳です。英語できないし、鍵を預けるから勝手にやってくれやと言っていたのに、お客さんが来たら、『みどりさん、もう来ちゃったから早く来て早く来て』と、電話が10回ぐらい鳴ったこともあります。そんな感じの行動、言動だった上原さんですが、3組のゲストをご紹介した後、遅れてごめんなさいとガラッと入ったら、4人、オランダ人の方、半纏（はんてん）を着てストーブにあたっていました。それでニコニコして『なかなか似合うじゃねえか』なんて言って。こんなふうの上原さんが、どんどん変わっていくんですね。自慢しに行くんですね。ほかの方に『いや、うちにはいい人しか来ねえ』というのをすごく自慢しています。

上原さんも非常に楽しみにしていて、お酒を酌み交わすというか飲み交わすとか、私を挟んでコミュニケーションをとるのを非常に楽しみにしてくれています。これが私たちがインバウンド観光について狙うところになります。

私たちが実際やっていきたいなと思っているところは、旅行会社さんでインバウンドの対応の負担を負うのは難しいところがあると思うんですね、小さな旅行会社さんもありますから。そういうところと組むことで旅行会社にインバウンド対応の負担を負わずに、でも旅行業法にちゃんと則した合法的ツアーを地元の方が提供できて、そしてそ

の報酬を得られる、そんな仕組みを確立したいという野望を持っています。これ展望と書けなかったのは、ちょっと確認していないことがあり過ぎて、野望となっております。

今、長野県は、世界で行きたい場所10位以内に入っています。今のうちにこういうシステムを確立できないかというふうを狙っていて、ちょっと旅行会社さんのほうにアプローチしていこうかなと思っているので、そんなところもぜひ長野県の方でご協力をいただければ非常に幸いです。

そしてこれ最後なんですが、私の座っていた場所にディスプレイがちょっと置いてありますけれども、まさに岩原さんが関係するところですが、漆職人さんは非常にいい腕を持っています。でも、私たち日本人は漆器を毎日使うという方が減ってきています。だけど、例えばフランスではジャパン（漆器）というのがホットワードとしてもものすごく、ジャパンレッド、ジャパングラックというのは非常に大きなワードになっています。特に2020年に向けてこれからジャパンはさらにホットになっていくというふうに考えられているので、この漆で今、私たちボトルストッパーを開発していて、世界から受注や問い合わせを受けたいなというふうに考えて、この3人の職人の方々と組んでこれを開発していきまして、できれば来年にこれを販売していきたいと思っています。試作品があそこにあるんですけども、よろしかったら手にとって見てみてください。高級感満載です。4～5日かけて飲むワインのボトルストッパーとして使っていただければと。

『女性の手現金を』、『外国人旅行者の有りのままを』、『職人の手に挑戦を』という事で私たちがやっている活動紹介でした。ご静聴、ありがとうございました。

【広報県民課企画幹 塩川ひろ恵】

ありがとうございました。続きまして、岩原裕右さん、お願いいたします。

【岩原裕右さん】

初めまして、ただいま紹介いただきました『未空（みそら）うるし工芸』の岩原裕右と申します。自分なりの表現で精いっぱいお話しさせていただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

では早速ですが、まず私が普段どのような仕事をしているかというところからお話させていただきます。私は普段、仏壇や家具などを製造する会社に勤めておりまして、それと同時に独自の工房『未空うるし工芸』というものを営んでおります。昼間は会社の方に勤めまして、そこが終わり次第、6時か6時半ごろですか、自分の工房に戻りまし

て『未空うるし工芸』として請け負った仕事をしている、そしてオリジナルの商品なんかをつくっております。その中で『jaCHRO』（じゃっくろ）というオリジナルブランドを立ち上げまして、かつてない漆塗り製品づくりということをコンセプトに商品を展開しております。ちなみに、工房名の『未空うるし工芸』の未空は未来の空に羽ばたくという意味からつけさせていただきました。実はこの名前は長女の名前でもありまして、最近ちょっと娘も年ごろになりまして、恥ずかしいと言われることが増えてきて、ちょっと困っているところです。

次に『jaCHRO』というブランドの由来は、先ほど土屋さんのほうでもお話がありました。ジャパン、漆ですね、そしてクロマティックスというのは色彩論という意味があります。この二つを組み合わせ、『jaCHRO』というブランド名をつけさせていただきました。

ブランド名のとおり、彩り豊かな商品展開というものも心がけております。そしてこちらがブランドロゴの説明になりますが、漆を塗る前に『とうごし』という道具を使いまして、漆の中にある不純物を取り除く際にこの写真のような作業を行います。そちらをモチーフにして、ブランドのロゴとさせていただきます。

そのブランドの第1号の商品がこちらになりますが『漆塗りのマグネット』になります。一見、漆塗りの製品には見えないと思うんですが、チョコレートをイメージしてつくっております。これは漆塗り製品に興味を持っていない方でも「何これ」と言った感じで、思わず手にとってしまうような商品をつくりたいと。今まで漆塗り製品にあまり興味がなかった方でも気軽にお使いいただけるような商品をつくりたくて製作いたしました。

下の写真のように、オリジナルのロゴマークなんかを入れて、記念品なんかとしてもご利用いただけるようになっております。ちなみに写真は、一昨年、日本排尿機能学会様の第23回の学会が松本市で行われました。そちらの記念品として実際に採用していただいた商品になります。

こちらは牛革に漆塗りを施した商品になりますが、この漆塗りを施したレザー、皮を『jaCHRO leather』と名づけまして、オリジナルブランドの商品はもちろん、素材としての提供も行っております。下の写真のように、ほかのブランド様とのコラボレーションという形でも展開しております。こちらは製作の際に、やはり皮ですので割れが出てしまったりといろいろな苦勞もあったんですが、試行錯誤の末、何とか商品化まで結びついた商品です。

そのほか、試作なども含めると、ステンレスの靴べらやシルバーのペンダントトッ

ブなど、金属に漆を塗ったものや、こちらの写真のように漆塗りのギター、こちらも県内の企業さんと共同してつくっております。そのほかには漆塗りの名刺などもつくっております。もちろんこのような変わったものだけではなく、いわゆる木曾漆器の定番であります座卓ですとか、そういったものの修理なんかも行っております。右側の写真がローテーブルの実際の商品の写真になります。

このような形で、従来の漆塗り製品とは少し違ったものをつくりながら仕事をしているわけですが、そういった中でもやはりポリシーというか、思いのようなものがあります。

1つ目が漆器の産地として、一つの街として木曾平沢の街を少しでも昔のように元気を取り戻したいということ、もう一つが、日本の伝統産業である漆塗りの技術やそれを施した製品をもっともっと身近に感じていただき、漆塗り製品のユーザーを少しでも増やしたいということです。

こういったことを達成していくために、これまでの漆塗り製品の概念を覆すようなものをこれからもつくり続けていきたいと思っております。そしてこのような活動を地元の木曾平沢に拠点を置いてやることで、漆器産地としての木曾平沢の街や漆器産業そのものを国内、さらには海外にもPRしていければと思っております。

次に、私が実際、具体的に取り組んでいることや、今後の課題になっていることをお話しさせていただきます。まず1つ目なんですけど販路の拡大ということで、やはりこのような時代ですので、ただ物をつくっているだけではなかなか難しいと思います。商品が増えると同時にそれを売る相手も増やしていかなければいけません。当然、国内だけではなく、海外にも販路を広げていかなければいけないと思いますが、これはなかなか簡単なことではありません。これに関しては実際に海外などに販路を持ったバイヤーさんなどが来られる大きい展示会に出展をしています。

私の場合、現状全て自分一人でこなさなくてはいけないので、海外に対しての営業というとなかなか厳しく課題が山積みですが、私の場合、コラボレーションや素材提供という形も行っておりますので、そういったお客様の販路に乗せて海外へも展開していけるのではないかと考えております。とはいえ、少しずつでもこのような課題をクリアしまして、自分自身でも海外に販路を広げていきたいと強く思っているところです。

次に地産地消、地消地産というところを意識していきたいと思っておりますが、県のほうでも産業の生産性が高い県づくりということの中で、地域内経済環境の促進、地消地産、県産品消費の拡大、森林資源の活用というようにうたっておられます。なので、いろいろとご尽力されているところかとは思いますが、私どもの地元にあります木曾漆器

工業協同組合さんのほうでも、そちらが中心となりまして漆の木の植樹や下草刈りなどの整備を行っております。まさに県が掲げる『地消地産』に当てはまる場所だと思っております。

しかし現在、実際に使用されている漆の割合が、概算ではあるんですが、海外産のものが95%、残りの5%ほどが国産です。そしてさらに県内産の漆というと、その中の本当にわずかということになってしまいますので、やはりこのような組合さんが行っていることに積極的に参加して、自分自身でも県産の漆ですとか、組合で精製した漆を積極的に使っていきたいと思っております。写真は実際に下草刈りをしているところや植樹を行った様子、そして漆をかいている様子になります。

次に観光、地域の活性化というところで、まずは自分ができることからということで、私自身、今まさに工房兼ギャラリーを移転している真っ最中ですが、その場所がちょうど木曽平沢の南の入口に位置する場所になります。その立地をうまく活用して地域の活性化につなげていきたいと思っております。

私の工房は外側がガラス張りになっておりますので、それを生かし、中の作業風景が容易に見られるような、そんな工房にしようと思っております。お客様もいざ工房見学させてくださいと声をかけるのはちょっと抵抗があると思いますが、工房の前を通ったときに自然と作業風景が見えれば、通った方も気軽にのぞいてくれるかなと思っております。そして今日、土屋さんと出会うことで外国人の方も受け入れられるかなと、そんなように心強く思っているところですので、よろしく申し上げます。僕がこの入口に工房をこのようにつくることで少しでも観光につながっていったりと、あと地場の産業の発展につながっていければと考えております。

次に伝統技術の継承、後継者の育成というところですが、非常に大きな課題の中にやはり技術の継承、後継者不足というものがあります。私どもの地元では文化財修復チームという組織がございまして、その組織は地元の職人25人ほどから成り立つ組織で、塩尻市にあります国の重要文化財の『小野家住宅』というところや、これもまた国の重要文化財ですが上野の東照宮ですね、そういったところの仕事を受けてたりしております。この受けたお仕事を、その都度、集まった職人で協力してこなしていくというスタイルになっております。

個性が強い職人たちがチームをつくるということは全国的にも非常にめずらしいことで、この形は大変新しい形だと思っております。現在、県外の産地の方々がこういったものをどうやってやっているのかという興味を持たれて見学に実際来られたという実績もございまして。

仕事自体は文化財の修復が主なので、技術的にも材料的にも昔ながらのやり方で進めていきます。ですので、技術の継承としてはもってこいの環境です。私自身もこのチームで多くの伝統技術を学びましたが、今後このような場を後継者育成や技術継承という場にも利用していければと思っております。

また、組合直下の木曾漆器青年部という組織がございますが、こちらでは昭和女子大学との共同事業で『cocoro concept』というものを行っております。この事業は簡単に言いますと、学生がデザインしたものを私たちが実際に制作し商品化するという事業ですが、こちらの事業がきっかけで大学を卒業した都内在住の生徒さんが、木曾の上松にあります上松技術専門校のほうに卒業後入学し、そして県内の家具製造会社に就職するといったことにもつながりました。写真はミーティングの様子ですとか、実際にでき上がった商品の写真になります。

そしてさらに、平成26年に阿部知事とのティーミーティングを行った際の意見交換がきっかけになりまして、筑波大学との共同事業により空き家や空き店舗などを利用しての青年部の拠点づくりというものを行い、一時的ではあったんですけども、その場所を県外のアーティストの方にご提供をいたしまして、実際に受け入れるということをやりました。そして、今後このような場を最大点に活用して、アーティストさんの受け入れはもちろんなんですけれども、後継者の育成や技術継承の場としても存分に利用していければと思います。こちらは県の補助金を利用してやらせていただいておりますけれども、やはり今年度がもう最後の補助金の期限というか3年目になりますが、ここで終わってしまうと何の意味もありませんので、やはり継続的にこのようなことを県の方や、より多くの方のご指導のもと続けていけるようにと考えております。

ここまで、私の取組などをお話しましたが、最後に、私が現在に至るまでの経緯や実績を少し紹介させていただきます。

私は現在の仕事につくまでいろいろな仕事をしておりましたが、私がこの仕事を選んだきっかけは家業でありますこの仕事を、父がやらないかと声をかけてくれたのがきっかけになりました。会社の後継者は既におりましたが、何の仕事をしていても常に独立心があつた私は業界的にも独立に一番近いのではないかとということで、安易な考えでこの世界に入りましたが、当然、こんな甘い世界ではありません。しかし、この仕事を始めて大変厳しいということを感じたのとはまた別に、非常にやりがいがあり楽しい仕事だとも感じました。そして仕事を覚えていくうちに自分の商品が作りたくなり、会社の設備を最初はお借りしていましたが、少しずつ窮屈になり2010年ごろ木曾平沢の中にある空き家、空き工房をお借りして物づくりをするようになりました。それが『未空

うるし工芸』の始まりです。

その後、2012年に『未空うるし工芸』として正式に登録いたしました。自分の商品だけでなく地元の業者さんを中心に請け仕事をいただけるようになってきました。それで、その2年後、2014年に自分の制作している商品をもっとたくさんの方に使っていただきたいということで、漆塗り製品に興味がなかった若い世代の方にもぜひ興味を持っていただきたいという思いから、オリジナルブランドの『jaCHRO』というものを立ち上げました。

そして大きな転機が訪れたのが2016年です。これが初めての試みだったんですが、東京ビックサイト、国際展示場で行われているギフトショーに出展いたしました。これは自分一人でやろうとすると相当な費用や手間がかかるんですけども、地元にあります第三セクターの塩尻・木曽地域地場産業振興センターさんに大変なご尽力いただきまして、何とかグループ展という形で出展することになりました。ですが、少し話はそれてしましますが、このセンターは現在、建物の老朽化などの問題から今後の存続が危ぶまれております。私にとってこのセンターがなければ現在の私はありませんし、当然この場にも立っていないと思います。ですので、私なりのセンターの必要性を訴えかけていき、センターがよりよい形で残っていけるようにできることをやっていきたいと思っております。

すみません、話をギフトショーに戻しますが、その年、ギフトショーで、先ほど少しお話ししましたが、C Y P R I S（キプリス）という革製品などを扱う国内でもトップクラスのブランドさんから『jaCHRO leather』を使用したいというお話をいただきました。打ち合わせなどを何度も重ねてついに商品が完成いたしました。想像以上の商品で大変うれしく思いました。実際の製品の写真がこちらになります。

さらにその後、転機が訪れまして、『LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 2016』というものに選出していただきました。このPROJECTは各県数名を選出し、自動車メーカーのLEXUSさんがパトロンとなりまして一つの商品をつくり出すという企画なんです。この年、LEXUSさんが初めてやったプロジェクトになります。このプロジェクトの代表に選ばれて、さらにこのような好機が立て続けに起こったことで、今思うと少し自分のところで浮ついたところがあったと思います。このPROJECTに出て会場で全国の匠の皆さんにお会いしたことで、ほかの方のすごさを思い知り、自分は本当にまだまだだということを痛感し気づかせてもらったことが私にとってさらなる転機になりました。また、全国のたくさんの業者の中から選ばれた方たちです。すごい方たちばかりで、このプロジェクトで得た出会いというものは僕にとっ



でも大変大きな財産となりました。

しかし好機はこれだけでは終わらず、同年8月11日に上高地で行われた第1回山の日記念全国大会という山の日の制定を記念する大会で、記念品として『jaCHRO』のオリジナル商品である漆塗りマグネットを採用していただきました。こちら漆塗り製品をより多くの方に使っていただけるきっかけになったのではないかとうれしく思っております。写真は実際の商品になります。

その後、そしてその年の締めくくりにもこのような実績を評価していただき、信州のすぐれたブランドを選定・表彰する信州ブランドアワードというものに入選させていただきました。振り返りますと、この2016年という年は自分にとって転機となり大きな前進の年になりました。その後、今までの実績を励みにさまざまなことに挑戦してきましたが、本年に入りまして、プロ野球のゴールデングラブ賞という聞いたことがある方もいらっしゃると思いますが、そちらを主催します三井広報委員会様が主催する、三井ゴールデングラブ賞という公募展でファイナリストとして選出していただきました。写真は実際にその賞に応募した製品です。今日、ちょっとお持ちしておりますけれども『jaCHRO leather』、漆塗りのレザーを使いましてコーヒースリーブにしたものになります。

現在に至るまで自分のポリシー、思いを貫くために、そして会社と自分の工場の仕事の両立という部分で体力的な部分や時間が限られているといったところですごく気持ち的につらい時期もありました。そして現在でも苦労していることもたくさんありますが、今後はさらに前進していけるように少しずつ体制を整えていきたいと思っております。

私がやっていることというのは、今までの伝統の形を少し崩している部分もありますが、決して現在までの伝統工芸の形を否定しているわけではありません。私のいるこの業界は大変歴史が深く、伝統もある業界ですので、私のやっていることに対して当然賛否両論、いろいろなご意見があるかとは思いますが、私としてはただただ今やっていることを生業とし、私自身、そして木曽平沢の街が産地としてこれから先、50年、100年と残り続けていければと思ってやっております。

木曽平沢の街もまだまだこれからという感じではありますが、ぜひ一度、木曽平沢の街がどんなところなのか、足を運んでみていただければ幸いと存じます。そして今後も未空うるし工芸、そして木曽平沢の街をどうぞよろしくお願いいたします。

私の思いをうまくお伝えできたか、不安ばかりですが、このような貴重なお時間をいただき大変感謝しております。皆様、長い時間ご静聴いただきましてありがとうございました。

【広報県民課企画幹 塩川ひろ恵】

お二方、ありがとうございました。

それでは、ただいまご発表いただきましたお二人と知事の3人でフリートークに移りたいと思います。フリートークの後に会場にお集まりの皆様を含めた意見交換を行いますので、ご質問などがございましたらそちらでお願いいたします。

では、このフリートークの進行を土屋さんをお願いしたいと思います。土屋さん、よろしくお願いいたします。

【土屋みどりさん】

よろしくお願いいたします。岩原さん、緊張しましたね。

【岩原裕右さん】

しました。

【土屋みどりさん】

私たちのプレゼンテーションを見ていただきましたけれども、阿部知事、どう感じになりましたか。

【長野県知事 阿部守一】

お二方のすばらしい発表を聞かせてもらって、会場の皆さんも、いい取組をされているなと思って聞かれたと思います。

感想と、今日は総合計画がテーマなんで総合計画の視点に絡めてちょっと私が感じたことをお話しさせていただきます。

今日、皆さんにお配りした冊子でいくと、今回、6本の政策推進の基本方針というのを掲げていまして、ちょっと宣伝がてらお話しするので、8ページをごらんいただければと思いますけれども、政策推進の基本方針が6つあるんですよ。左側の『学びの県づくり』と右側の『自治の力みなぎる県づくり』、これが2つ柱があって。その真ん中に4つ『産業の生産性が高い県づくり』『人をひきつける快適な県づくり』、これ、どっちかという未来に向けてクリエイティブな社会をつくっていきましょうと。それからその右側に安心して希望あふれる社会をつくるという意味で、やっぱり行政の責任ある取組が強く求められているのが『いのちを守り育む』ということですし、それからもう一つは『誰にでも居場所と出番がある』、特定の人が頑張らなくていいよとか、排除されるよう

な社会をつくらないようにしなきゃいけないと思っています。

土屋さんの先ほどの活動は、私からすると、もちろん女性活躍なんで『誰にでも居場所と出番がある県づくり』、それからインバウンドの観光客を取り込む『人をひきつける快適な県づくり』でもあるし、もうちょっと言うと、観光産業の生産性の向上という観点もあるんで、あるいは起業支援だったり再就職支援だったり、この『産業の生産性が高い県づくり』と。これ3つにまたがっているわけね。さらに言うと、その全てのことの根幹が学びだと思います。多分いろいろな学びを、これまでもされてきてこれからも学び続けていかれるんだと思います。

例えば、民宿・ペンション、みんな困っているんですよ。長野県、何しろ宿泊業の客室稼働率、全国最低レベルですからね。旅館は最低で、ビジネスホテルや何かも入れても非常に低い状況ですから困っているんですけども。英語でのアピールに特化して外国人だけという、ある意味、ニッチ（すきま）のところを切り開いた産業イノベーションだと思いますし、学びを通じて、通訳という非常に強力な武器をお持ちなんで、それを活かされたということで、やっぱり学びの成果が出ているんだろうなというふうに思います。

それから地元の民宿の人とのコラボレーション、自分たちだけで空き家を探して買い取ってという話じゃなくて、上原さんとコラボレーションして、上原さんにとっても生きがいでもあるし、民宿を再開できてうれしいんだろうと思いますし、土屋さんたちにとってもハッピーだし、何よりも来る人にとってもハッピーな仕組みをつくっちゃったというのは、私からすると、これ自治の力ですよ。何というか、人に頼らないで隣近所の知り合いで何かみんな違う経験とかね、違う財産を持っているんで、それを組み合わせれば何かできるんじゃないかという発想が大事なんで、それはまさに自治の力だというふうに思います。

そういう意味で、土屋さんの話はいろいろな分野にまたがっているし、この総合計画を理解していく上で示唆に富んだお話だったと思います。そういう形でこの『学びと自治』というのを、皆さんにもちょっと理解していただければありがたいなと思います。

それから岩原さんの話ですけども、まずですね、岩原さんのいろいろな分野に関係しているということは申し上げるまでもないんで、あんまりその話は強調しないでですけども。前に木曽の漆器のティーミーティングでお話ししたけど、今は会社に勤務している傍ら工房をやっているの。

【岩原裕右さん】

そうです。

【長野県知事 阿部守一】

それ、まさに新しい生き方ですね、新しい生き方。ちょっと皆さん、34ページのところをごらんいただければと思いますけれども、33ページ・34ページというところは、これチャレンジプロジェクトって書いています。チャレンジプロジェクトって何といったら、県の計画とか行政の計画というのは普通何をやるか細かく書くんですが、このチャレンジプロジェクトのところの計画はこれをやりますって書いていないんです。一応こんなことを考えたいねっていうことだけ考えて、これから県庁内にプロジェクトチームをつくって進めていこうというふうに思っているんです。

要は世の中の変化が激しいんで、この総合計画は5年計画なんですけど、今よかれと思っても、3年か5年たったら、多分、時代遅れになってくる話もいっぱいあるし、5年の社会を見据えて物事を考えるだけだと、この変化の大きい時代はとてもしゃないけど短か過ぎるんで、もっと長期的なスパン、ここは2030年のあるべき姿って言っていますけれども、もうちょっと長い視野でいろいろな物事を考えていきたいと思いますというふうに思って、このプロジェクトを入れています。

まず岩原さんの取組は、この6の人生のマルチステージ時代における多様な生き方、まずそれに該当しているわけですよ。ちょっと小さな字で書いてある『仕事』のところを見ていただくと、『半農半X、一人多役の促進』って書いてありますよね。まさに一人多役をされているわけですよ。会社に勤めながらこの漆器、漆工芸をやっていると。これまさに一人多役で。実は東京とか都会はそういう生き方、しづらいですよ。通勤時間も長かったりするし。長野県は、例えば今でも夏は農業、冬はスキーのインストラクターとかね、結構、長野県っていろいろなクリエイティブな仕事をしている中で、一人多役、半農半Xっていう言い方がありますがけれども、そもそも多い。これからやっぱり、私たち長野県、日本全体もそうなるべきだと思いますけど、もっとこういう多様な生き方を、要するに型にはまった生き方じゃなくて、一人多役であったり、今、人生二毛作社会の実現と言っていますけれども、やっぱりもう人生100年時代ですから、会社勤めが1回終わって、はいリタイアということでは済まない。それでは多分、人生を持て余してしまう。そういう時代にやっぱりマルチステージの人生を楽しめる、豊かにできるような社会をつくっていきたいというのがこのプロジェクトなんで、そういう意味でそれをもう先行されているなというふうに思いましたし。

それから、岩原さん、さっき最後に賛否両論あるって言ったけど、否もあるの？

【岩原裕右さん】

そうですね。

【長野県知事 阿部守一】

私はすごいな、いいじゃないと思って聞いているんですけど。

【岩原裕右さん】

ありがとうございます。ありがたいお言葉で大変自信につながります。やはり伝統工芸の世界というのは、今までの形というのをすごく重んじるところがかなりあるので、こういった僕のように金属に漆を塗ったり、僕以外にもガラスに漆を塗っている仲間もいますし、はたまた漆塗りの製品のように見える塗料を使ってやる技術もございます。そういったものを結構否定的に見られる方も中にはいらっしゃいまして、ただやっぱりきれいごとではないので、お客様がどういったものを求めているかというものを考えながら、そういった中で生まれたものがガラスに漆を塗るとか革に塗るとか、漆ではなくてウレタンですとか、そういった化学的な塗料を使うという一つの技術を逆に生み出していると思います。

【長野県知事 阿部守一】

ありがとうございます。県も、例えば漆で塗ったワイングラスとか、お客さんにプレゼントしたりしているんで、そうすると我々も伝統的な人からはちょっと怒られることがあります。例えばここで聞いている人たちは、みんないいんじゃないのというふうに思って聞かれていると思いますけど、どうですかね。いいですよ。新しい時代にはふさわしいなと思いますけど。

あと、ほかの観点でいくと、今までの技術をいろいろな分野に活用していくということとは、私は新しい付加価値を生み出していくと、この長野県、産業の生産性をどんどん上げなきゃいけないと思っているんですけども、せっかくいいものをいっぱい持っていたり、せっかくいい技術がいっぱいあるのもったいないなと思っているわけ、私は。

木でつくったワインクーラーをフランスから注文があって断っちゃったって、私、聞いたんですけども、量産できないから断ったっていう話。伝統産業だからなかなか量産しづらいのは私もわかるんですけども、何でそういうチャンスをもっと生かせない

のかなと。

さっきの職人のコラボレーションの話、あったじゃないですか。職人のコラボレーションは珍しいって話がありましたけれども。多分、これからグローバル社会になっていけばなっていくほど、一人の職人さんだけでできないわけですよ。一人の職人さんだと量的にも質的にも追いつかないんで、だからインターネットの時代なんで、世界中の職人が協力して何かつくるとかね。そういう新しい仕事の仕方というのをつくっていかなくちゃいけない時代なんで、まさに岩原さんがやろうとし始めている方向性というのは、私がある意味で理想とする社会に、さっきの働き方も含めて非常に近いなというふうに思ってお話を伺いました。

それから、地産地消、地消地産というお話を岩原さんにしてもらいました。長野県は地域内経済循環を促していきたいなというふうに思っていて、この計画のパンフレットの13ページのところをご覧くださいと思いますけれども、地域内経済循環の促進ということで、長野県はいろいろな物を生み出しています。あるいは逆に外からいろいろな物を買っています。もちろん自由主義経済ですから、どこで何を買おうが何をつくろうが、それは自由であります。だけど、もっとやっぱり地域で消費する物は地域で生産してほしいなというふうに思いますし、消費者の皆さんも、同じ物だったらなるべく地域の物を買っていただくと地域の経済は潤って、それがめぐりめぐって皆さんの地域が発展するわけですね。

例えば長野県の、ちょっと旅館・ホテルの皆さんがいたらちょっと怒られちゃいますけど、ごめんなさいね。長野県に観光に来て海の魚のお刺身とか、あんまり出してほしくないなと私は思っています。でも最近、長野県の水産試験場で『信州サーモン』とか『大王イワナ』とか、淡水魚の新しい品種をつくったんで、結構、そういうのに置きかえてもらってきています。そういう方向はありがたいと思っていて、そういうのが地消地産。地産地消ってよく言うじゃないですか、地元でつくった物を地元で消費しましょうと。もちろんこれも、私、大事だと思っています。地元でつくっている物をなるべく地元の人に買ってもらう。もう一つ大事だと思っているのは地消地産。地消地産っていうのは、地元で消費しているものをもっと地元でつくれるようにしませんかと。

例えば漆を使っている職人さんがいっぱいいるのに、さっきのお話のように長野県産の漆って少ないわけですよ。さっき言ったように、旅館・ホテルでいろいろな食事を県外の方に提供しているにもかかわらず、長野県の魚って、コイとかね、フナとかあるけど、あんまりなかったんで、信州サーモンとか大王イワナをつくって県産の魚に置きかえていきたいと思います。そういうことによって長野県の産業が、単体じゃなくて、いろ

いろな形で連携していくと、もっともっと相乗的に経済効果が生み出されてくると思っています。

あと、例えば自然エネルギーなんかも、東日本大震災の後は、みんな省エネ・省電力だって騒いでいたのに、今、みんなどうなっちゃったのと思っていますけれども、日本人は忘れっぽいなと。だけど、あのとき、東京の人たちは、自分たちの電力は一体どこから来ているんだっていうのを痛切に実感したはずなんですよね。痛切に実感して、もっと電力、大事にしなきゃいけないなと思った人が多かったはずですし、それだけじゃなくて、やっぱりその電力を生産している地域のことにも思いを寄せなきゃいけないって多くの人を感じたはずなのに、今、ほとんど忘れちゃったんじゃないかっていうふうに思っています。

長野県は、今、自然エネルギーの拡大をやっていて、地元の、例えば小水力発電だとか太陽光発電だとか、太陽光もちよっと景観に配慮をもっとしなきゃいけないんですけども。あと、木のバイオマスエネルギー、バイオマス発電だったり熱利用だったり、そうしたものを進めてきているんです。ここにもそういうエネルギーのことを書いています。最大電力需要に対する長野県内で発電する電力というのは、今、9割程度自給できるようになっています。これ理論値なんで、長野県の場合、大手電力会社でほかのところへ持っていかれちゃっているんで、それを持っていかれちゃうともっと低くなっちゃいますけど、それを仮に長野県内で消費するとすれば、9割方、電力は賄えるというのが今の状況で、これは確実に100%は超えていくというふうに思っています。

今、世田谷区と連携して、長野県の企業局が水力発電で発電した電力を世田谷区の保育所の子どもたちが使ってくれていまして、その子たちには、長野県に思いを馳せてもらっています。裾花川発電所とか高遠発電所で発電した電力だよと、みんなが使っている電気はこんなに景色のいいところで、こんな自然が豊かなところで発電しているんだよっていうのを子どもたちに教えてもらっています。それは単に長野県を知ってもらうということだけじゃなくて、やっぱり生きていく上で必要なものって、一体、誰がつくっているのと。エネルギー、どこから来ているのと。食べ物はどこから来ているのと。知らないじゃ困りますよねというのが私の感覚なんで、そういうことはもっと我々長野県に住んでいる人間ももっと考えていくことがやっぱり、何ていうか、社会のエネルギー消費ということも進めていこうと思っていますけれども、社会の問題を解決することにもつながるし、そして地域の経済を豊かにすることにもつながるというふうに思っています。そういう意味で、漆の話だとか地消地産のお話は、大変いいお話をしていただけたなと。

それからもう一点だけ申し上げると、さっき昭和女子大の学生がデザインして作品をつくって、それだけじゃなくて上松技専に来てくれたという話がありましたよね。実は、私、木の文化、森の文化、こうしたものを長野県からしっかり発信をして創造していきたいと思っていて、そういう意味で、ちょっともう一回、さっきのチャンレジプロジェクトのところをごらんいただければと思いますけれども。34ページですね、34ページの上のところ、美しく豊かな木と森の文化の再生・創造プロジェクトっていうのをやっています。

これ、やることは、これから具体的に考えますが、一つは、木曽地域は何せ森の文化。そして学びの場も木曽青峰高校だったり、上松技専だったり、そして林業大学校があります。ちょっと権兵衛峠を越えれば信州大学農学部が林学科を持っているんで、あそここのエリアを木と森の学びの拠点にしていきたいなというふうに思っていますので、ぜひちょっとそういうこともまた一緒に考えてもらえればありがたいなというふうに思います。よろしくをお願いします。

#### 【土屋みどりさん】

広くカバーしていただいたんで、どこを掘り下げていこうかっていうのがすごく悩んでいますけど、8ページの6つの基本方針の中で、県が特に力を入れた方がいいと思っいるところがあれば教えてください。

#### 【長野県知事 阿部守一】

全部そうなんですけれども、やはり『学びと自治』がベースだと思っているんですよ、学びと自治。

例えば産業の生産性を上げていく上でも、今や人手が足りないわけですよ、どこの業種も人手が足りない。人手が足りないから一人一人の生産性を上げなきゃいけない。一人一人の生産性を上げるためには、やっぱり一人一人に学んでもらう。例えば産業だったら職業人材の育成、さっき言ったように例えば林業大学校をもっと強化するとか、高等教育機関をもっと充実させるとか、そういうことが必要なんで。実はこの産業の生産性が高い県づくりも、人をひきつける快適な県づくりも、いのちを守り育む県づくりも、誰にでも居場所と出番がある県づくりも、全ての原点は学びにあると、さっき言ったように思っていますし、そしてやっぱり県も、先ほどおっしゃっていただいたように、元気づくり支援金も含めて皆さんの活動をできるだけ応援をしていきますけれども、やっぱり何よりも自治ですよ、自分たちがやる。



私がこんなことをいうと語弊があるかもしれないけど、私、いろいろな分野の政策を見ていて、うまくいきそうなものとうまくいかなそうなものというのは、仕組みがいいとか補助金の制度がいいとか、そんなことでは全くなくて、それを本気でやる人たちが地域にいるかどうかが一番重要だと思っているんですよ。行政で補助金を出したって世の中はうまくならないですよ。例えば漆塗りを世界に広げたいとかですね、世界のお客さんを日本の民宿に迎えたいとかですね、お二人のように、そういう強い思いがある人がいないと、幾ら私が例えば外国からのお客さんを増やしましょうねと、ではこんな補助金をつかったからみんな使ってくださいねと言ったって、絶対うまくいかないですよ。そういう意味で自治は大事だと思っています。

#### 【土屋みどりさん】

そうですね、その自治をするためにかなり大事なのかなと思う部分が、やはり、多分、皆さん、多くの方々は、こんなのやってみたいなとか、こんなのができたらいいなっていうアイデアはあると思うんですよ。でも、そのアイデアを自分一人でチームをリードして引っ張っていく人ばかりかというところじゃない。そのチームがあったらそこに入りたいとか、入っていくことで活用できる力が、多分、いっぱいあると思うんですよ。そこの土台づくりが自治のポイントになるのかなと思っています。

#### 【長野県知事 阿部守一】

全くおっしゃるとおりなんで、要するに、何かを実行する思いだとか、何か実際に実行していただくのは、多くの場合、県民の皆さんだと思いますけれども、何かそういう場をつくる、あるいはそういうことを学べる場所をつくる、あるいはネットワークをつくる、そういうことをやっぱりしっかり応援していくのが私たちの役割だというふうに思っています。そういう意味で、学びの場をもっと充実していかなくちゃいけないというふうに思っています。

学びの場は、私の頭の中で大きく3つあります。一つは、もちろん子どもたちの学びの充実ですね。それからもう一つは人生100年時代、私も学び直さなくちゃいけないと思っていますので、大人の学びですよね。それからもう一つは産業人材の育成。この学びも大きくこういう3つの観点で考えていかなくちゃいけないだろうと思うんですよ。

ちょっと『学びの県づくり』のページが11ページ・12ページにあるんですけど、これから力を入れていかなくちゃいけないことは、学びは特にいっぱいあるんですけど、一つは高等教育をもっと振興しなくちゃいけないと思っています。高等教育はいろいろ

るな産業振興とか地域の活性化につながる話で、右上に書いてありますけれども、県は相当、大学を初めとする高等教育の振興に支援しています。松本だったら松本大学が新しく教育学部をつくるのに県も応援をさせてもらいましたし、県立大学、この4月に開学をしました。また、諏訪東京理科大が公立化をするに当たっても相当、応援をさせていただきましたし、これからもしっかり応援していきたいと思います。

何でかという、海外の、例えばわかりやすいのはシリコンバレーみたいなところですけど、産業が発展しているところは、大体、高等教育機関を核に発展しています。要はいろいろな知の拠点になっているわけで、そういうことがやっぱり地域の発展には不可欠だというふうに思っているのと、それから長野県は大学の収容定員に対する18歳人口の数が多し。18歳人口に対する大学収容定員が少ない。要は大学の数が少ないわけですよ、定員も少ないし。だからみんな県外へ行くのは当たり前だと。もちろん、私、県外や、あるいは海外に行く若者の足を引っ張る気は全くないですけども、でも話をすると、県内に大学があれば県内のほうがいいのになというふうにおっしゃる学生とかお母さんたち、お父さんたち、結構いるわけですよ。県外の大学へ行くのが当たり前という発想自体が変わらないと、どんどん人材が流出しちゃうんでね。今、県外の大学へ行った人たちの4割しか帰ってこない。もっと帰ってきてもらおう努力を我々しなきゃいけないですけども、その前に、県内でもOKの子がいるのなら、県内の教育も充実しなきゃいけないというふうに思っています。

それと同様に重要なのは幼児期の教育ですね、幼児期の教育。左上に『生きる力と創造性を育む教育の推進』と書いてありますけれども、最近、世界的に言われているのは、幼児教育が大事だと。小学校・中学校、もちろん大事ですけども、その前の就学前のちゃんとした学びが大事だと。学びも国語・算数・理科・社会というよりは、いわゆる非認知的能力と言われてますけれども、例えば我慢強さとか、協調性とか、コミュニケーション能力とかですね、そういう能力というのはテストで測れないですよ。国語・算数・理科・社会は測れても、そういう我慢強さだとか、協調性だとか、コミュニケーション能力は測れない。測れないけれども確実にあるでしょ、そういうのがうまい人、うまい人。そういう部分が実は国語・算数・理科・社会という認知能力以上に、人生を良くするためには重要だというふうに言われています。しかもそういう能力は、実は幼児期に身につくというふうにも言われているんで、そういう意味で、今、長野県、いわゆる『森のようちえん』を広めています。信州型自然保育、『信州やまほいく』と言っていますけれども。今、150園を超えました。自然の中で五感を養う、生きる力を育む。こうした教育って東京みたいな大都市では逆立ちしてもできない。だけど子どもた

ちにとって極めて重要なことなんで、もっとこういうのを拡げていきたいと思っています。幼児教育支援センターをつくって、幼児教育をもっと充実しようという話を教育委員会ともさせてもらっています。

ちょっと教育の話をし始めるととまらなくなっちゃうんで。あと大人の学びの場ももっと充実させていきますし、さっき言ったように林業大学校とか農業大学校とかあるいは工科短大とか、県が直接経営している学びの場もありますし、それ以外の産業人材教育機関とも連携して、産業人材の教育もしっかり進めていきたいなというふうに思っています。

そういう意味で、いろいろな分野の根底にはやっぱり人づくり。県民の皆さん、教育県じゃなくなっているというふうに思われてしまっていて残念なんですけれども、教育県じゃなくて学びの県だっているというふうに胸を張って言えるようにしていきたいと思っていますので、ぜひ皆さんには協力していただきたいと思います。よろしく願いいたします。

#### 【土屋みどりさん】

その幼児教育に関連して言うと、やはり女性の方々が次の世代を育てているわけですよ。私は女性の方々とお付き合いすることがとても多いので、その中で感じているのが、女性はもちろんお父さん・お母さん両方が楽しく仕事をして、その背中を子どもが見ていると、その子どももやっぱり大人になりたい、早く働きたいというふうに明るい希望の光というか、将来につながる子が育つんじゃないかなとすごく思うんですよ。今、子育てしながら創業支援講座を受けている方々がいらっしゃるんですけども、その方々を見ているとすごく大変なこともあるんですよ、創業って。大変なことを乗り切りながら、でもすごくうれしい感動があって、それをお子さんと一緒に体感しているんですよ。その瞬間というのは本当に見ていてすばらしい。これが本当にすばらしい教育なんじゃないかって、お金の価値とかもそういうのも含めて、お子さんに伝えているのがこういう女性なんだというのを感じるんですよ。

なので、子どもの教育っていう面でも、お父さん・お母さんが楽しく仕事ができる環境をつくるというのが非常に重要じゃないかなと思っているんですけども岩原さんどうですか、お子さんがいる立場で。

#### 【岩原裕右さん】

先ほどもちょっとお話ししましたが、娘がおりまして、二人いるんですけども、僕

のいる業界というのは、やはり昔は家業でやっているところが多かったですので、やっぱり分業制になっておりました。僕のように男の職人がいて、研ぎという工程があるんですけども、そういった部分というのは女性の方がやはり割と向いている部分がありまして、研ぎは女性の方、それをふき上げたものを男性の職人が塗り上げていくという、分業制でうまく流れていたものが、やはり生業にならなくなってきてしまって、それでなかなか残れないと。残っても、男の方だけが残って女性の方は外にパートに出してしまうとか、そういった状態に現在なってきてしまっています。もうおそらくほとんどが家業として、夫婦でやられている方っていうのは少なくなってきてしまっていますね。

そんな中で、ちょっと、今、子どものお話が出ましたけれども、先ほどちょっとお話ししました塩尻・木曾地域地場産業振興センターのほうでは、木曾漆器の伝統技法である堆朱（ついしゅ）塗りという技法がありますけれども、そういったものを体験して実際に品物をつくるっていう、塩尻市なんかの保育園ですとか、そういったところから子どもを呼んで体験なんかもやっているんです。やはり近くに目を向けてみると、ちゃんと漆器産業に対して教育の場というのは根づいているなど。ただ、なかなかやはりそれが、経済的な理由でしたりとかいろいろな理由で存続できなかつたりとかということも起こってきてしまっています。

でもやっぱりそういう子どもが経験できる場というものも残していかなくちゃいけないと思いますし、そういった自分の親父の姿ですとか、お母さんのそういった仕事をしている姿というのを見て育った子というのは、やはり自然と興味も持っていてくれると思うので、そういう機会もやっぱり残していきたいですし、自分の娘なんかに自分の仕事はこういう仕事なんだよということも教えていきたいなと思っております。

#### 【長野県知事 阿部守一】

全くそうなんです。今の子どもたちは結構、何ていうか、家庭に安らぎを求められない子どもの中にはいたりして、そういう子たちのことも考えなくちゃいけないし。あと普通に暮らしている子どもたちも、やっぱり人口減少になってくると、だんだん多くの人たちと接する機会が、特に長野県、中山間地域が多いんで、減ってきているんじゃないかというふうに思っています。

そういう意味で、実は大人がもっと学校に関わってもらいたいなと。もちろんお父さん・お母さんの姿というのはすごく大事だと思いますので、保護者の皆さんにもぜひ積極的に関わってもらいたいと思いますし、それからそうじゃない地域の大人にももっと入ってもらって、特に、私、産業界に期待していて、岩原さんと土屋さんみたいな方た

ちにも学校の教壇に立ってもらって、自分はこんなことをやっているんだと、自分の人生はこうだったと、こんな大変なことがあったけど、こんな楽しいこともあるよというのを子どもたちに知ってもらおうっていうことはすごく重要で、いろいろな産業がありますけど、例えば岩原さんみたいな漆産業に携わっている人と接する機会というのは多くの子どもたちはほとんどないですよ。だからもし漆産業に向いていたり関心がある子どもがいても見逃されちゃっていると思うんですよ。

それはほかの分野でもみんな同じで、子どもたちの能力っていろいろな能力があって、さっきから国語・算数・理科・社会を目の敵にしている申し訳ないんですけども、国語・算数・理科・社会ができれば世の中OKな訳はないですよ。この間も学校の先生たちと少し話して、国語・算数・理科・社会がすごくできる子が100人いる社会と、みんなてんでんばらばらの得意分野がある社会とどっちがいいかって考えたら、後者だよっていう話をしていたんです。でも今って、国語・算数・理科・社会ができる子だけ育てようという感じになっちゃっているんで、そういうところは変えなきゃいけないと。

『学びの県づくり』と言っているのは、『教育県再生』でもよかったんですが、教育というと教える側がどうしても主体ですけど、学びっていうのは学ぶ側が主体ですよ。やっぱり大人ももちろんそうですけど、子どもたちにもやっぱり主体的に学んでもらいたいと思っているんですよ。主体的に学ぶきっかけというのは、やっぱり岩原さんみたいになりたいとかね、土屋さんみたいな活動、格好いいなというところから、多分、学ぶ意欲っていうのは出てくるはずなんで、そういう意味でやっぱりいろいろな大人の人たちが子どもたちに関わってもらえるようなことを意識的につくっていくことが、実は『学びの県づくり』にとっては重要じゃないかなというふうに思っています。

【土屋みどりさん】

子どもが憧れる大人をたくさん輩出するということですよ。

【長野県知事 阿部守一】

そうですね。

【土屋みどりさん】

ぜひそうやって、それを学校教育にどう反映していただくかをお願いしたいと思います。

【長野県知事 阿部守一】

教育委員会は私の所管じゃないので、教育長にお願いしなきゃいけないんですけど、私はもちろん県としてそういう方針でやっていきますけれども、県の教育委員会は、私の指揮命令系統では直接はないんで、一番いいのは、保護者とか住民の皆さんが知事がこんなことを言ったけど、これいいねというふうにもっと言ってもらうのが一番いいと思いますんで、ぜひよろしくお願ひいたします。

【土屋みどりさん】

そうですね、呼んでいただいたら行きますよね、学校とかね。

【岩原裕右さん】

そうですね。今日もそうですけれども、すばらしい場ですので、漆器産業もそうですし、そういったことをどんどんアピールできる場であれば、呼んでいただければ、ぜひ、不慣れなんですけど、頑張りたいと思います。よろしくお願ひします。

#### 4 知事とのディスカッション

【広報県民課企画幹 塩川ひろ恵】

お時間の関係もございますので、会場にお集まりの皆さんからのご質問だとかご意見をお受けしたいと思うんですけども、よろしいですか。

では、皆様の中で、今までのご発言にご質問だとかご意見だとかご感想だとか、おありになる方、いらっしゃいましたら挙手をお願いできますでしょうか。

【参加者】

こういう総合計画というのに非常に興味があるんですが、学びと自治の力でというふうなことですが、私は自治っていうと自治体の自治と思ってしまったんですね。どうも聞いているとセルフコントロールというか、自らやっていくっていうようなことだったので理解に少し時間を要してしまいました。その辺について少しコメントいただければ。

【長野県知事 阿部守一】

自治体の自治もちろん重要ですので、ちょっと補足してお話をさせてもらいたいと

思います。

もちろん自治というのは、先ほど申し上げたように、長野県は多様な地域があるんで、それぞれの地域のコミュニティだったり、いろいろな分野での自治ということも重要だと思っています。それと同時に、地方自治法の中での都道府県になっているわけですし、市町村の自治ということもこれも重要であります。そういう意味で、この自治というのは我々行政の、行政としての地方自治体の重要性ということももちろん含んでいます。

ぜひ皆さんと共有しておきたいのは、日本は民主主義社会ですよ、国民主権。やっぱり一番重要なのは、私は知事ということで皆さんから負託を受けて県知事の仕事をさせていただいているわけですが、あるいは皆さんの代表者としての県議会議員の皆さんもいて、それで皆さんの思いを具現化するのが我々の役割。あくまでもこういう県にしたいとかこういう地域がいいよねと、こういう社会がいいよねというのは、皆さんが思わなければ決して実現しません。逆に強く願って皆さんが行動すれば、私は絶対、希望する社会というのは描けるし実現できるものだ。自分たちで描けない社会は実現できないんで、まず描くことが大事で、そういう意味でこの計画というのは、皆さんと思いを共有してこういう社会にしたいねと、こういう方向でこういうふうに進めましようねというものです。

自治という意味で、皆さんには、県とか市町村にもっといろいろな意見を出してもらいたいと思います。例えば県がパブリックコメントってやっているのを知っていますか。意見を求めますといっても、ほとんどのものは数件ぐらいしか出てこないんですよ。それ我々のお伝えの仕方がもしかしたら悪いのかもしれないですけども、でもインターネットを使える方は県のホームページを見ていただければ、こんな意見募集していますっていうのは出ているんで、どんなことでもいいですから。私は何も意見がないよりは意見を言ってもらったほうがいいです。反対の意見でももちろんいいですし、もっとこうしたいほうがいいとか。何でかという、県民の皆さんが何考えているかわからない状況で行政を進めるのは極めてよろしくない。せつかく私たちが意見を聞きたいと思っているのに主権者の皆さんに発言してもらえないというのは、やっぱり困る。それは、日本の行政における地方自治があんまりうまく機能していないんじゃないかと私は率直に思っています。

この間、会見で記者の皆さんに質問されて、これはちょっと危機的ですねって言ったのは、例えば市町村議会の議員選挙というのは無投票で決まっちゃうこと、最近、多いじゃないですか。あれって大丈夫なのと私なんか思うんですけどね。もちろんなっている人は別に文句をつけるところはないのかもしれないけど、でも自分たちが主権者なの

に、選ぶ機会もなく本当にいいのかなというふうに思いませんか。だんだんそれが当たり前になると、だんだんだんだん市町村とか都道府県のやっていることに無関心になって、それはやっぱり、結局、私は社会を良くしていかないだろうというふうに思います。

そういう意味でこの自治というのは、いわゆる住民自治と団体自治と2つあるというふうに地方自治法の勉強とかすると言われます。住民自治っていうのは自分たちでできること、その地域でやれることはみんなで一緒に協力してやりましょうねと。それにはやっぱり行政、市町村行政だったり、都道府県行政に県民の皆さんが積極的に参加してもらおうということが重要です。それはもちろん皆さんだけに頼むんじゃないで、我々行政ももっと皆さんが参加しやすいようにしたり、もっとわかりやすく情報を伝える努力をしなければいけないんで、それはもっともっと工夫の余地があると思いますが、でもやっぱり、そういうことにもっとどんどん意見を出してもらいたいし、応えてもらいたい。

それからもう一つの団体自治、これも日本の場合、私は不十分だなと思っていて、国と県と市町村の役割分担が非常に曖昧、ある意味でみんながちょっとずつ分担しているわけですよ。一番極端なのがさっきの教育、特に小中学校の教育は、あんまり私が言うに非常に役所に批判的、国に批判的になってしまいますけど、文部科学省が事細かに学習指導要領を決めています。これはちょっといろいろ議論あるんじゃないかと、私、思っていますけれども。それで、学校の先生の給料っていうのは県が払っていますから、小中学校の先生の定数をどうするかというのは県が決めています。県で決めています。それで、さっき教育委員会と知事がいると言いましたけれども、予算は私の権限ですから教育も。でも、例えばご存じのとおり小中学校というのは市町村立ですよ、県立じゃないですから。市町村立ですから、学校の建物をどう良くしようとかいう話は市町村が考えているんですよ。で、予算は市町村長が考えるんで、何かみんなね、文部科学省も関与する、私もちょっと関与する、県の教育委員会もちょっと関与する、市町村の教育委員会も関与する、市町村長も関与する、みんなちょっとずつ役割と責任を持っているんで、皆さんが、多分わかりづらいと思います。これって一体誰に文句を言えばいいのというのはわからなくないですか。私もよくわからないですから。もう少し私はシンプルにしなければいけないと思いますし、それは今の地方自治があまりに十分じゃないんだと思っています。

身近なところで、例えば市町村長が責任を持つべきだっていうものをもっと増やして、それで市町村単位ではなかなかできないことは県がもっと責任を持ってやって、本当に



国でしかやれない、例えば外交だとか防衛だとか通貨だとか、あるいは県域をまたいでいる河川だとか道路だとか、そういうところは国がやってもいいんですけども、何かみんな、国も県も市町村も同じようなことをやっているのは効率も悪いし、誰に文句を言えばいいか、何よりも国民の皆さんがわかりづらいところが問題であると。地方自治とか地方分権の話はずっと言われているんですけど、まだ地方分権は不十分だし、道半ばだと思います。

地方分権の話が私があんまり言うと、何か国と県との権限の分取り合いみたいに誤解されることがありますけれども、これは別に私に権限がほしいんじゃないで、県民の皆さんの実現したいことを本当に実現するんなら、もっと分権型社会にしなきゃいけないんじゃないかというふうに思っています。

そういう意味で、今、ご質問いただいたことに戻りますけれども、ここで言っている自治にはもちろん行政の自治も入りますので、私どもとしてはこれから、例えば市町村と県の役割分担のあり方とか、あるいは国に対して、今言ったようにもっと権限は県とか市町村でいいんじゃないのというようなことについては積極的に提言をしていきたいなというふうに思っています。よろしいでしょうか。

【広報県民課企画幹 塩川ひろ恵】

ほかにご質問とかご意見ございませんでしょうか。

では土屋さん、岩原さん、言い足りなかったこととかありましたら、この機会におっしゃっていただけますか。

【土屋みどりさん】

いろいろ県のほうで意見をたっぷり受け入れてくれるんだなとか、聞いてくれる場所があるんだなということがよくわかったので、ありがとうございます。今日はいいい機会を本当にいただきまして、ありがとうございました。

【岩原裕右さん】

今日、このような場に立たせていただいて私自身も、何ていうのか、知事のお考えですとか、県の方針というのでも改めて理解することもできましたし、いい機会になりました。僕としてもやはり産地なんかをどのようにアピールしていくとか、どういうふうにやっていけばいいかということ、これからもご協力いただいてやっていければなと改めて感じるところであります。今日は素晴らしい場所に呼んでいただき、ありがとう

ございました。

【広報県民課企画幹 塩川ひろ恵】

限られたお時間ですのでご発言いただけなかった方もいらっしゃると思います。封筒の中にアンケートが入っておりますので、ご記入いただきまして、入口のアンケート回収ボックスにお入れいただければと思います。

それでは最後に知事から、本日のタウンミーティングの総括コメントをお願いいたします。

## 5 知事総括コメント

【長野県知事 阿部守一】

では私のほうでまとめちゃいますけれども、皆さんにお配りした冊子の1ページにメッセージを書かせてもらっています。ここに書いてあることが基本的に私が申し上げたいことです。

皆さんと今日一番共有したいのは、『学びと自治』っていうことを、これから長野県は強くアピールして、県民の皆さんと充実していきたいと思っていますので、そのことはぜひ共有してもらいたいと思います。

さきほどから申し上げているように、学びは、子どもの学び、大人の学び、それから職業人材の育成、こういう大きく3つの側面があると思っていますので、そのそれぞれについて、我々そうした環境を充実していきたいと思っています。県民の皆さんにも、例えばさっき言ったように、学校でもっと地域の人たちの力を貸してもらいたいという声を上げたらぜひ協力してもらいたいというふうに思いますし、また、例えば今もウィメンズカレッジとかやっていますし、あと環境カレッジみたいなものをこれからもやっていこうと思っていますし、いろいろな学びの場をつくっていこうと思っています。ぜひそうした学びの場に皆さんにも積極的に参加をして学んでもらいたい、あるいは皆さん側が教える側になってもらいたいと思います。

学びというのはいろいろな学びがあります。国語・算数・理科・社会だけじゃないです。私なんか、例えば農家の皆さんの知識とか経験というのはすごく学びがいがあると思いますし、今の季節だったら山菜採り名人に学びたいとかですね、いろいろな学びがあるんで、教える側、教えられる側っていうのはやっぱりテーマによって相対的なん

で、ぜひ皆さんにも積極的に、教えてもらう側だけじゃなくて皆さんが知っていることとか皆さんが経験したことを教える側にもなってもらいたい。そういうお互いが学び合える長野県をぜひつくっていききたいなというふうに思っています。

自治の話は、さっき言った、我々行政としてももっと自治が充実強化できるように取り組んでいきますし、またそれぞれの皆さんが、産業であったり地域社会を良くする取組だったり、それぞれのところでできることをしっかり進めていただきたいというふうに思っています。

そういう意味で、ここの『はじめに』のところに、ガンジーの言葉で『未来は、今、私たちが何を為すかにかかっている』ということを書いていますけれども、やっぱり民主主義社会ですし国民主権ですから、私も知事として頑張らなきゃいけないんですけど、皆さんの取組が基本です。そこはぜひ共有していただきたいと思います。

それから、パソコンの父と言われているアラン・ケイさんという方の言葉で、これ、私、議会の提案説明でも使ったことがありますけれども、『未来を予測する最善の方法は自らそれを創り出すことである』と。未来って、与えられるものじゃないですよ。長野県の未来って、放っておいてできるわけじゃないですよ。当たり前のことですけども。あるいは何か、県が何かしてくれるからとか、国が何かしてくれるから長野県の未来がつくられるわけでは私はないと思います。長野県の未来をつくるのは皆さんですよ。漆の未来をつくるのは岩原さんかもしれないし、女性活躍の未来をつくるのは土屋さんかもしれないし、そういうことを私たちは応援する。私がつくるんじゃないですからね、私がつくるんじゃないで、私たち行政はそういう取組を応援するのが一番重要な役割。もちろん行政としてやらなきゃいけないことはこの計画の中にしっかりありますけれども。それと同じに未来をつくり出すのは、やっぱり県民の皆さん一人一人だというふうに思っています。ぜひそのことは共有していただきたいと思いますし、それからガンジーの言葉が出たんで、もう一つ、『よきことはカタツムリのようにゆっくり進む』ということもガンジーが言っているんですよ。何ていうか、例えば企業の価値は、上場している企業は株価が上がっているのか下がっているのかということで評価されるんで、とかく短期的な視点になりがち、物事の評価が短期的な目線になりがちだと思っています。我々行政に対する評価も、我々自身も1年の単年度予算主義でやっているんで、何ていうか、毎年、毎年、どうしようかってやっているところもよくないなと思っていますけれども。さっき言ったように、我々チャレンジプロジェクトのようなプロジェクトで、もう少し息の長い中長期的な視点でいろいろなことを考えていきたいというふうに思っています。

私、いろいろなところで仕事をしている中で、印象に残る言葉を幾つかいろいろな方に言われたことがあります。私、昔、愛媛県庁で仕事についてたときに、NPOの参加を促進しなきゃいけないというので私が条例をつくらうという話をしたことがあって、そのとき、先輩に言われたのは、このガンジーの言葉どおりではないですけども、もっとゆっくりやれと、ゆっくりやれと言われた。普通はもっと急いでやれって言われるんですが、もっとゆっくりやれって言われたんですよ。でも私は、その言葉にはすごく納得しています。なぜかという、NPOの活動を活発化しようと、もっと愛媛県のNPO活動を活発化しよう、応援しようと、そういう条例をつくらうと思ったんですけども、阿部君、君だけがやる気になったって、みんな、それ本当に必要だと思っているのかと。まずは、県民の皆さんのためにやるんだったら、多くの人たちがやっぱりこういう条例が必要なんじゃないのと、こういう社会にしていくことが重要じゃないのというふうに、ある程度の人たちが思わずに条例だけつくったって、形はできるけど世の中変わらないじゃないかって言われて、なるほどなど私は思いました。ガンジーがそんな意味で言っているかどうかかわからないですけど、すごく私はフィットする話だなというふうに思っていました。

世の中、みんな良くしたいと思っているんですよ。私も、世の中を良くしたいという活動をされている方々と出会っています。でも本当に社会が変わっていくためには、その人だけでは絶対できないんですよ。周りの人たちにどれだけ共感してもらえるか、あるいは周りの人たちがどれだけ思いをひとつにして一緒に行動してもらえるか、それによって全然違ってくる。多分、岩原さんとか土屋さんの活動も、多分そこが重要な話だと思って。やっぱり人と人がコミュニケーションをとって共感をしてもらう仲間を増やすというのは、今日一回話して明日はみんな仲間、という話には多分ならないんで、やっぱりある程度時間がかかるんですね。だけど、ですけどですよ、ですけど今からやらなければ永遠にできないんですよ。時間はかかるけれども、今からやらなきゃ永遠にできない。そういう思いでこの今回の総合計画はつくっているんです。

『学びと自治』というのは奥が深いですから、いきなり、この計画をつくって来年から日本全国の人に、長野県は学びの県ですなんて絶対言われたいですよ。絶対言われるわけない。そんなことがあったらおかしいですから。だけど、今からやれば10年後ぐらいには、どこの県から見てもね、長野県すごいなと、学びの県ですなと、あるいは自治力が強い県ですなというふうに、私は絶対言われるようになると思っていますし、それをするのが私たちや行政の役割だというふうに思っています。そういう意味で、皆さんにも協力をしてもらいながら、この総合計画を進めていきたいなというふうに思っ

います。

せっかくなので私から質問したいんですが、この冊子の3ページをちょっとごらんいただいでいいですか、3ページ。これ県民の皆さんのちょっと感覚を教えてくださいなんですけれども。長野県を取り巻く状況、人口は減っています。皆さんご承知のとおりどんどん人口が減っている状況で、そしてその下にあるように年齢別人口構成もどんどんお年寄りのウエイトが高くなっているという状況です。

行政があんまり言うと怒られちゃうことなんで、ちょっと皆さんの感覚を教えてくださいなんですけれども。この下の棒グラフで2015年と2060年を比べてみていただくと、いわゆる高齢者、65歳以上人口が、現在30.1%が2060年には32.4%。いわゆる生産年齢人口が57%から52.3%になりますというふうに書いてあります。これは一般的にこうなんですね。統計上は。でも長野県の地域社会へ行くと65歳ってまだ若者じゃないですか、若者なんて言うと言い過ぎかもしれないですけど、65歳から74歳の人を75歳以上の人たちと同じ高齢者の扱いをすること、我々行政からすると、サポートする対象者になっちゃうんですね、これぐらい高齢者が増えるからサポートするんだよということで、その保険だったり、福祉のことも考えなきゃいけないんです。

でも私はここの層の人たち、もちろん病気の方とか体が不自由な方もいらっしゃるんで、そういう人たちにはしっかりサポートしなきゃいけないんですけれども、むしろもっと働いてもらうとか、社会で活躍してもらうということが重要だと思うし、そうすると、いわゆるその生産年齢人口とか高齢人口の区分というのも、時代とともに変わっていかなくちゃいけないんだろうなというふうに思っているんですが、それって皆さんどうなんですか。ちょっと前にいるお二方から言ってもらおうと会場の人と話しやすいかもしれない。

#### 【土屋みどりさん】

生産年齢人口が64歳までになっていますよね。64歳までしか本当に働かないんだったら、その人の貯金次第でしょうけど、その後は生きていけなくなっちゃうので、やっぱりサポートは当然必要だと思うんですけど。

うちの父母とかものすごい元気に働いているので、65歳から高齢者って言われると何となく違和感を持ちます。

#### 【長野県知事 阿部守一】

ですよね。ただ、あんまり行政がこういう話をすると、それは何か医療費とか福祉を

削減したいからみたいな話と結びつけられちゃうんで、あんまり言いづらいんですよ。別に、私、そんな発想は全くないですから。活躍できる人には活躍してもらえる環境をつくっていくということが重要なんで。そうするとこの世の中でこの統計上、この生産年齢人口と高齢人口と分けて、何となく社会は将来こうなると言っているのは、あんまり実態に合っていないのかもしれないなと思っているんですね。この辺で何かご意見ある方はいないですか。大体、みんな、納得していただいていますか。

あとちょっと、せっかくだから私が聞きたいこと聞いちゃっていいですか。さっき岩原さん、街づくりの話をちょっとされていましたがこれも。これ、この17ページのところに『人をひきつける快適な県づくり』って書いていて、引きつけるとか引きつけられ方っていうのは人それぞれいろいろあるんだろうと思いますけれども、私は長野県の高校生とか若者と話していて、結構、長野県の若者は長野県のことを好きだなと思っています。好きだなと思っているんだけど、何かね、多分、一個欠けているんですよ、何か。何ていうか引きつける磁力が何か欠けているからみんな出ていっちゃうんですよ。そこが多分、本質的な話なんで、それって一体何だというふうに思いますか。どうすれば、例えば若者たちは長野県にもっと定住して、逆にいろいろな人たちが長野県に来るかっていったら、何が必要か、それは我々行政が考える話ですけどね。

【岩原裕右さん】

そうですね、すごく難しいんですけども、僕自身もやはり長野県はすごい好きですし、もっと言えば塩尻市、特に自分の地元がすごく好きなんです。その魅力っていうと、もう、今現在あるもので僕はすごく既に魅力的に感じるんですよ。ただ僕が魅力と感じているものが、県外の方から見たらそうかっていうとちょっと違ったりして。例えば不便なんですけど、周りに何もなし。ただやっぱりすごく静かですし、物事に集中できる。なので、新しいものをつくるということもできるので、今ある魅力っていうものをわかりやすい形でアピールしていくことも大事なのかなと。

【長野県知事 阿部守一】

土屋さんは。

【土屋みどりさん】

私、個人的に、海外の方を呼ぶようになって感じたのは、熱量かなと思うんですよ。

私も地域が大好きで、外に出ていたからこそわかったことなんですけれども、あまりにも大好きで、いろいろな新しいことを学ぶと自慢をしたくなるんですよね。見て、ちょっと、ここへ来て、ここすごいからっていうのを何か自慢して連れて行ったりとか、あと企業の通訳をしていてもそうなんですけど、工場であるすごい技術があるんですけど、それを見て、これ見た、こうやってやるんだよみたいな、こういう仕組みになっていて、というふうに興奮して伝えると、すごくおもしろがるし、また絶対、次、来るみたいになるので。

例えばホームページでも何でも、いや、ここすごいんだよっていう、パーソナルな視点が入った熱量みたいなものがあると、つい自慢してしまうところにつながるんじゃないかなと。まず深く掘り下げて知ること、やっぱり学ぶことなんですけど、そこが大事かなと思います。

#### 【長野県知事 阿部守一】

そうね。ありがとうございます。

県がやらなきゃいけないことの一つはやっぱり、いろいろな地域のいいところ、例えば昨日の中尾歌舞伎みたいな地域の伝統文化というのは本当にいっぱいあるんだけど、それぞれの地域の人たちが一生懸命頑張っていて、それぞれの地域の人たちが発信しているんで、どうしても訴求力が弱いなと思っています。そういうところは、多分、広域自治体の我々がやらなきゃいけない話だろうなというふうに思います。

あとやっぱり、長野県、今、高校生にはみんな信州学をやってもらって地域のことをもっと学んでもらおうとしています。これ、私が教育委員会にそういうのをやったらって言ったんですけど、私、若者と話していて、意外と長野県のことをわかっていないんですね。例えば、さっきおっしゃっていたようにね、こんな高い技術力があって、こんな世界と取引している企業が近くにあるのに全然知らないなと思って。やっぱり地域のことを知らないんで、その魅力も感じられないということもあるなというふうに思います。そこはもうちょっと発信力を高めなきゃいけないんで、これは広報県民課の宿題でもあるんで、ぜひよろしくをお願いします。

それからもう一つ、私が『人ひきつける快適な県づくり』で考えたいのは、やっぱりまちづくりをしっかりしていきたいなと思っているんです、県として。まちづくりって、ハードとソフト両面です、両面。若者と話していて、やっぱり街の中に集まれる場がないと。熱量を上げる場というのも結構少ないなというふうに思っていて。この間、青木村の道の駅がリニューアルしたんで行きましたけど、そこには広場があるんです、真ん

中に。村長は何にでも村の人にどんどん使ってもらいたいなんて言っていましたけど。ヨーロッパの町とかへ行くと、大体どこでも広場があってね、みんな集まれるじゃないですか。都会も結構、集まる場所とかあるわけですね。

うちの県の例えば中山間地って、いいところはいっぱいあるんだけど、何かね、集まる場が結構少ないなと、気軽にね。何かそういうところを核に人がつながって、やっぱり人がつながり合わなきゃ何も始まらないんで、もっと人がつながる場、物理的な場と、それからその物理的な場じゃないけれども、バーチャルなネットワークとかね、そういうのをやっぱり強化していくっていうことが実は魅力をつくっていくことにつながるし、土屋さんのおっしゃっていることと通じる話じゃないかなというふうに思うんで、ぜひそういう何か、人が出会う、人がつながるような町・村、そういうものをしっかりつくっていききたいなというふうに思っています。

私、昔、横浜市で副市長をやっているときに、『みなとみらい』って、あれ相当緻密にまちづくりの絵を描いているんですよ。建物の高さも海側と内陸と変えていて、海側に向かって高さが低くなるようにつくとかね。広報ブースの掲示の規制もあたり、どのエリアにどんなものを配置するかとかというのも相当議論するわけです。しかもあれは横浜市という行政だけじゃなくて、企業と一緒に街の絵を描いているんで、行政だけで描くと、どうしても何か無機質になるんですよ。無機質になるんで、やっぱり地域の皆さんの思いがもっとまちづくりに入らないと居心地のいい場所にはならない。

そういう意味で、ここの『快適な県づくり』のところでは、一つはまちづくりをしっかりとやっていきたいと思えますし、それが観光にも結びつきます。県では、今、『観光地域づくり』という言い方をしています。単なる観光じゃなくて、やっぱり私は、観光で来る人たちが行きたいところというのは、もちろん景色がいいところもあるかもしれないけど、それだと1回来たらもう来ないです。2回、3回来るところは、多分、土屋さんに会いたいとか、漆を塗りたいとか、そういうことで2回、3回来てもらえるんです。そういうことを考えると、やっぱりそこで暮らしている人が幸せじゃなければ、いいところって言えないじゃないですか。自分たちがつまらなそうに暮らしているのに、観光になったときだけ何か仮面かぶってね、いいところですよなんて言えないでしょう。やっぱり暮らしている人たちが幸せな県にすることが実は観光にも結びつくし、観光地域づくりと言ったのは、単に観光客を引きつけるだけじゃなくて、その街自体、熱量も上げるし、街自体の居心地も良くしていくということとセットだなというふうに思っているんで、ぜひそういう観点でこの『人をひきつける快適な県づくり』を進めていきたいというふうに思っていますので、この点についても、ぜひまたお二方にも協力いただ



ければと思いますので、よろしくお願いいたします。

今日は、県政タウンミーティングということで、連休中に大勢の皆さんにお集まりいただきまして大変ありがとうございました。

今日は、この総合計画を細かく説明するんじゃなくて、考え方のエッセンスを土屋さんと岩原さんの取組、それからちょっと参考にいろいろな活動を私が引用させてもらいながら、皆さんにお伝えをさせていただきました。この『学びと自治の力で拓く県づくり』というのは、今、申し上げたような観点です。皆さんが主役なので、そしてまた我々行政にどんどん意見とか提言をしていただくということが基本ですので、ぜひ、この総合計画が本当に皆さんの力で実現していき、そして長野県に暮らす全ての人たちが元気で幸せに暮らせるような社会をつくるためにご協力いただきますようお願いをして、私からの結びの挨拶というふうにさせていただきたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

【広報県民課企画幹 塩川ひろ恵】

ご参加の皆様、長時間にわたりどうもありがとうございました。土屋さん、岩原さん、どうもありがとうございました。

それでは、以上をもちまして県政タウンミーティングを終了といたします。本日はどうもありがとうございました。

(以上)